

# 首都大学東京 学士課程教育

## 「学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」

プログラムの名称：人文・社会系 国際文化コース

### 1. 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）

#### （1）取得できる学位

<哲学分野、日本・中国文化論分野、欧米文化論分野、表象文化論分野>

学士（文学）

<歴史・考古学分野>

学士（史学）

#### （2）取得できる資格

定められた教職及び教科に関する科目の単位（講義・演習・実習）の修得ならびに卒業を要件として、社会、公民、地理歴史、国語、中国語、英語、ドイツ語、フランス語について中学校教諭一種免許状・高等学校教諭一種免許状を取得することが可能である。また学芸員、社会教育主事の資格についても定められた科目と単位の修得と卒業を条件に取得することも出来る。（なお、本学在学生在が教職の資格を取得しようとする場合には、必ず入学年度発行の「教職課程の履修概要」を熟読参照する事。）

#### （3）育成する人材像

国際文化コースでは、異なる時代や文化そして状況に置かれた他者への深い理解力と想像力を涵養することで、自分自身および自らの文化と社会とをより客観的に把握し、近視眼的発想を乗り越えて大局的判断を下せる人材を育成したいと願っている。人文・社会系は東京都立大学人文学部時代から50有余年の歴史があり、卒業生は内外各地で活躍している。卒業後には、情報、放送、出版、文化、教育、金融、流通などの民間企業、NPO、NGOなどの団体、国、都道府県、市町村などの公務員、中学高校の教員など、多様多彩な進路が開かれている。

#### （4）プログラムの特色

自らの文化と異文化を学ぶことは、多様化する国際社会の中で生きる上で、互いの理解を深める重要な役割を果たすことになる。国際文化コースでは、人文学の基礎となる哲学、歴史、文学、文化、言語、芸術の視点から5つの分野を設け、国際的な知識を深めるとともに、それぞれの専門分野での学問的探求を行っている。以下、分野ごとに特色を紹介する。

#### 哲学分野

哲学分野は西洋哲学と西洋古典学という二つの専門領域から成り立っている。両方の研究領域に共通することは、言葉によって作り上げられてきた西洋の精神生活を研究教育することである。西洋の哲学・思想・文学は、知を愛し求める精神と細部にまで考え抜かれた精密な言葉によって作られているので、基本的には誰もが知的に学ぶことができる。そして、それをしっかりと学べば、自ら考える

力と自立した精神が養われる。もちろん、このことは翻って、私たちが日本人であることの自覚を促すことに大きな意義を持つと思われる。

内容について言えば、哲学の専任教員が研究している領域は古代ギリシアから現代欧米までの各時代におよび、また、存在論、認識論、論理学、言語哲学、科学哲学、倫理学、宗教思想の各分野にわたっていて、西洋の主要な哲学・思想の主要な時代と分野をカバーしている。授業は原典講読を中心とした演習、特殊講義、また学生自らの研究発表をもとにした討論から成り立っている。

西洋古典学の研究対象は、ギリシア語・ラテン語のみならず、それらの言語で書かれた韻文と散文の諸作品をカバーしている。授業は主にこれらの古典語による原典講読の演習から成り立っている。言葉によって作り出される世界の豊かさと奥行きを深さとを知ることは、私たち自身の言葉と状況を改めて見つめ直すことにも繋がると考える。

### 歴史・考古学分野

歴史学と考古学は、いずれも過去の社会に生きた人々の暮らしを明らかにする学問である。両者の違いは、歴史学が主として文字史料に基づいて研究を進めるのに対して、考古学が扱うのは遺物や遺跡などの物的資料であるという点である。そこで歴史・考古学分野では、学生諸君にはまず必修科目である歴史学概論と歴史学方法論の授業を通して、歴史認識をめぐる諸問題に関する理解を深めてもらう。その後、一人ひとりの興味・関心にしたがって、講義や演習・実習を通じて日本史・アジア史・ヨーロッパ史・考古学に関する個別の問題を学ぶことになる。最終年次の4年次には、大学における勉強の総決算ともいえる卒業論文の執筆がある。

大学で歴史を学ぶということは、歴史に関する知識を百科事典のように増やすことではない。歴史の教科書に記載されているような知識が、何を根拠として、どのような形で生み出されてきたのかという、歴史的知識が形成される過程を自らの眼で検証することが重要である。そのために最適の手段が、卒業論文の執筆となる。卒業論文の作成にあたっては、あいまいな関心に形を与えて明確な問いを提出することが必要である。適切に提起された問いに対して、さまざまな資料を駆使して、想像力を科学的に用いて回答を与えること、そこにこそ歴史研究の醍醐味がある。

### 表象文化論分野

表象文化論分野は芸術表象研究（イメージ論、視覚文化論、パフォーマンス・アーツ研究、音楽・聴覚文化論、伝統芸能研究、言語芸術論などからなる）と文化表象研究（文化的事象を制度・権力・身体・メディアといった視座から検討する）をふたつの主要学習領域とみなし、理論的アプローチを重視しながら、美術、映画、音楽、演劇、文学から、舞踊、広告、デザイン、ファッション、マンガ、テレビドラマまでのあらゆるジャンルの作品、作家、運動などを研究対象としてあつかっている。このような学際的・領域横断的な学びの場の特長を活かし、芸術や文化に対する深い知識と理解を通じて市民生活を豊かにすることのできるような人材を育成することを目指している。

### 日本・中国文化論分野

#### [日本文化論]

日本文化論の目標は、スタッフと学生が共に学び、古代から現代までの日本語、日本文学の豊かさ、面白さを経験し、現代に生きる力を養うことにある。授業では正確に文章を読む力をつけ、自発的な発表能力や高い専門性を獲得する。常識や通説にとらわれることなく、先人の業績を虚心に学ぶと同時に、最新の知見を身につけていく。学ぶことの楽しさ、面白さを誰よりも魅力的に語れる専門のスタッフを擁し、文学・語学の諸領域を幅広くサポートする。日本文学と日本語を切り口に、日本文化

の独自性を学べることも本専攻の特色である。芸能・演劇、出版メディア、思想、言語文化などの広い視野に立って日本文学・日本語学研究の沃野に臨む。

#### [中国文化論]

中国文化論の伝統的特徴として「自由な雰囲気」を挙げることができる。教員・学生とも一つの狭い領域に閉じこもることなく、様々な分野を専門的に研究している。またその活動においては、書林に彷徨うばかりでなく、ユーラシア大陸を縦横無尽に駆けめぐっている。その中で特に評価されてきたのが「周辺からの視点」に基づく研究である。スタッフの研究・授業内容を大雑把に分けると「中国語学」・「中国文学」・「中国文化論」に分けることができるが、「周辺からの視点」ということで言うと、「中国語学」では、中国語の成立史、方言研究、江戸時代の中国語受容史、「中国文学」では図像学、植民地文学、続編研究、「中国文化論」では民話研究、上海研究などの分野で大きな成果を挙げた。学生たちは本教室で中国を中心としたアジアの言語と文化について基礎的な知識を習得できるとともに、上記のような最新の研究にも触れることも可能で、さらに演習での発表や卒業論文を通じて、人間としても大きく成長できる。

#### 欧米文化論分野

##### [英語圏文化論]

英語圏文化論では、英米はもちろん、広く英語圏の、文学を中心とする言語文化を教育の対象とする。講義科目では多様な英語圏の言語文化の歴史と現状を教授し、演習科目では学生ひとりひとりが課題に取り組むための批評と思考の力を深めることを目標にしている。文献読解力、コミュニケーション能力、自己表現力が基礎的な力として必須のものなので、実践科目においてはもちろん、すべての科目で学生の言語能力の練磨に努力している。

##### [ドイツ語圏文化論]

一年生のときに学んだドイツ語の知識を基礎として、ドイツ語を読む・書く・聞く・話すという総合的な語学能力を高めていくことを目指す。そしてその語学能力に基づいて、ドイツ語圏の文学、語学、歴史、思想、社会など文化全般にわたる知識を、それぞれの学生がもっている興味に応じて習得していく。最終的にはそれを、卒業論文という形でまとめ、表現することが求められる。ウィーン大学との交換留学制度もあり、ネイティブスピーカーによる会話や講義の授業も充実している。授業は少人数制で和気あいあいとした雰囲気。作家を招いての朗読会や夏のゼミ合宿などの企画も盛りだくさんである。

##### [フランス語圏文化論]

フランス語とフランス文化は、2千年以上前に、現在のフランスに当たる地域を古代ローマが征服したことに始まる。それ以来、ヨーロッパの交通の要衝であるこの肥沃な地で、ローマ文化と他の諸文化が混淆するなかから新しい独自の文化が生まれ、きわめて高度な発展を遂げた。フランス語圏文化論では学生諸君が、フランス語の深い学習を土台にフランス文化の精髓に触れ、自らの文化を見直す機会を提供するよう努めている。学外からも講師を迎え、ネイティブスピーカーによるフランス語の授業はもちろん、文化全般に関する多彩な授業を展開している。学部生が院生や教員と親しく交流しながら学べるのも仏文の特色だと考える。

#### (5) 獲得すべき学習成果

国際文化コースの学生は、卒業(学士の学位の授与)までにそれぞれ専攻する分野の学修を通じて、各分野固有の知識・理解及び技術とともに、普遍的に有効性を持つ能力として以下の学習成果を獲得すべきものとする。

以下分野ごとに固有な知識・理解及び技術について紹介する。

#### ① 分野固有の知識・理解及び技術

##### 哲学分野

まずは哲学と哲学史ならびに西洋古典学に関する基本的な知識を身につけた上で、主に原典の講読という、いわば書物との対話を通して、言葉で表現された思索と心情を可能な限り正確に理解すべく努めることで、自らの考える力と自立した精神を養い、そこからまた自分自身の思考と心情をやはり言葉によって明晰に表現し伝達する能力を身につけることを目指す。

- a) 古代から中世、近世から近現代に至る哲学的な知識や、古代ギリシア・ラテン文学史や古典文献学など西洋古典学の基本的な知識を身につける。
- b) 古代ギリシア語からラテン語、ドイツ語、フランス語、英語などで書かれた哲学者や作家の原典テキストを正確に読解できる言語能力を修得する。
- c) 原典が提示している議論や叙述内容を正確に把握し、論理的な一貫性と整合性をもった日本語の文章に再現できる能力を養う。
- d) 哲学領域においては、原典における個別の議論を哲学的な諸問題に関する哲学的知見と連動させて検討・考察する力を養う。
- e) 西洋古典学領域においては、作品の読解を通してそこに語られた内容とその表現を精緻に観察・把握し、その文学的伝統をも含めた文献学的理解力を養う。
- f) 上記の哲学的考察や文献学的理解を元に、自らの思索と解釈を加えた自分なりの議論を組み立て、論理的で説得力ある論文を作成する能力を身につける。
- g) 原典講読と内容把握、観察と考察、自立的思索と論述といった一連の学修と研究を通じて、専門的知識を修得するとともに言葉に対する鋭敏さを涵養し思考力を高める。

##### 歴史・考古学分野

- a) 歴史学と考古学に関する基本的知識を体系的に修得する。
- b) 歴史学及び考古学について、それぞれに固有の方法論を修得する。
- c) 歴史学における史料と、考古学における発掘調査の方法や物質資料の基本的な取り扱い方を修得する。
- d) 上記 a) において与えられた総合的な知識を基に、歴史学の各分野に関する深い知識を修得する。
- e) 歴史学と考古学の各専門領域における様々な論点についてさらに深い知識を修得する。
- f) 歴史学と考古学の専門書や具体的な研究を取りあげて深く議論し、自らも発信できる能力を修得する。
- g) 修得した総合的・専門的知識と問題解決能力を応用する。

##### 表象文化論分野

###### a) 芸術表象領域

芸術とそのさまざまなかたちにかんする知識・理解を深める。

- b) 文化表象領域  
文化とそのさまざまなかたちにかんする知識・理解を深める。
- c) 文化史領域  
歴史的観点から文化の諸相を理解する。
- d) 外国語領域  
異文化理解や言語分析に不可欠の外国語を修得する。
- e) 総合  
修得した専門的知識と問題解決能力を応用する。

② 当該分野以外においても普遍的に有用性を持つ能力

各専門分野共通

- a) コミュニケーション能力  
自らの考えや疑問を相手に分かり易く伝えるとともに、他者との議論を通して協調しながら作業を行うことができる。
- b) 情報活用能力  
多様な情報を収集・分析し、効果的かつ正しく活用することができる。
- c) 総合的問題思考力  
持っている知識、能力等を総合的に活用しながら、多角的な視点から物事を思考し、解決すべき問題の本質を見極め、それに取り組むことができる。
- d) 論理的思考力  
論理的展開を的確に理解したり、自らの考えを論理的に組み立てたりすることができる。
- e) 能動的学習姿勢  
自ら解決すべき問題・課題を見つけ、それに取り組む姿勢を備えている。
- f) 倫理観、社会的責任の自覚  
高い倫理観を持って、社会に対し主体的に関与する責任を自覚している。
- g) 異なる文化・社会への理解  
異なる文化的背景を持つ人・国・地域・社会等への理解を深める。

日本・中国文化論分野

[日本文化論]

- a) 正確に文章を読む力をつける。
- b) 自分なりの見解をわかりやすく伝える能力を身につける。
- c) 各時代の日本文学と日本語についての専門知識を、基礎的事項から最新の知見まで幅広く修得する。
- d) 日本文学と日本語の、多角的な研究方法を修得する。
- e) 日本文学・日本語を切り口として、日本文化の独自性を学ぶ。

[中国文化論]

- a) 現代中国語の文法を理解し、読み、書き、話す能力を身につける。
- b) 文言文（書き言葉）や各時代の古典文を読み、正しく理解する能力を身につける。
- c) 各時代の中国文学、各地方の中国文化に関する基礎的知識を広く修得する。
- d) テキストを読む際の工具書（各種辞典類）を正しく使用し、それを元に自ら注釈を施す能力を身につける。

- e) 演習形式の授業を通し、自身の意見や見解を正しく伝え、適切な資料を元に説得する能力を修得する。
- f) 各ジャンルの研究史を概観し、現在の研究状況を理解する。
- g) 卒業論文作成を通じて、資料収集、思考の整理、論文作成の方法を修得する。

#### 欧米文化論分野

##### [英語圏文化論]

- a) 英語のテキストを正確に読解できる言語能力を修得する。
- b) 複数の英語及び日本語のテキストの中および間に存在する隠されたものを読み解く能力を修得する。
- c) 上記 b) において読み解いたものを、説得的かつ論理的に口頭ならびに文章で英語を使用して適切に表現できる能力を修得する。
- d) 上記 b) において読み解いたものについて、近代社会を作り上げている様々なイデオロギーとの関連において解釈し批判する能力を修得する。
- e) 文学作品の読解を通して他者の内面を体験し、それと一体化することも距離を置いて批判することも出来る精神的可動性を養成する。
- f) 英語で発信される様々な情報を多様なメディアを通して取得し、自らも発信できる能力を修得する。
- g) 英語圏文化の背景にある様々な知識を系統立てて修得する。

##### [ドイツ語圏文化論]

- a) ドイツ語圏の文化についての興味を深め、その広い領域における知識を修得する。
- b) ドイツ語のテキストを正確に読解できる言語能力を養う。
- c) 文学作品の読解を通じて、人間の心理や社会とのつながりを洞察し、それを論評できる感受性と論理能力を養う。
- d) ドイツ語についての語学的な知識や歴史的な知識を修得する。
- e) ドイツ語で自らの意見や感情を表現できる筆記能力を養う。
- f) ドイツ語でコミュニケーションできる会話能力を養う。

##### [フランス語圏文化論]

- a) フランス語のテキストを正確に読解できる言語能力を修得する。
- b) フランス語及び日本語の複数のテキストの中および間に存在する隠されたものを読み解く能力を修得する。
- c) 上記 b) において読み解いたものを、説得的かつ論理的に口頭ならびに文章でフランス語を使用して適切に表現できる能力を修得する。
- d) 上記 b) において読み解いたものについて、近代社会を作り上げている様々なイデオロギーとの関連において解釈し批判する能力を修得する。
- e) 文学作品の読解を通して他者の内面を体験し、それと一体化することも距離を置いて批判することも出来る精神的可動性を養成する。
- f) フランス語で発信される様々な情報を多様なメディアを通して取得し、自らも発信できる能力を修得する。
- g) フランス語圏文化の背景にある様々な知識を系統立てて修得する。

#### (6) 卒業要件

国際文化コースの卒業に必要な単位は 130 単位。内訳は言語科目のうち第二群言語科目 12 単位、およびそれ以外の基礎科目群、教養科目群、基盤科目群 26 単位以上、専門教育科目群からは 74 単位以

上。なお専門教育科目の必修の単位数は各分野によって異なるので注意が必要。(本学在学生在が卒業要件を確認する場合には必ず入学年度発行の履修の手引きを参照すること。)

## 2. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）

### （1）専門教育における学習成果の確保のための科目編成・教授法・評価法等の基本的考え方

#### ① 分野固有の知識・理解及び技術

1年次には、単に専門的な知識に飛びつくのではなく、基礎科目、教養科目、基盤科目を通して、様々な分野の基礎知識を修得するとともに、語学の力をつけるために力を注ぐことになる。現代社会のさまざまな問題に関心を向け、深く物事を考察する能力はそれらの過程を通して自ずと深まっていく。また、国際文化コースの選択は2年次進級時であることから、それぞれ進級を希望する分野の導入的な科目や「入門」に属する専門科目を一部履修し、1年間かけてどちらのコースを専門的に学びたいのか、じっくり検討することになる。

2年次進級時にそれぞれの専門分野に所属すると、自らの知的な欲求に基づいて主に専門分野の科目を受講し、それぞれの分野において求められる固有の知的技術を修得していく。忘れてはならないのは、これらの基礎となる知的技術の修得は4年次に執筆することになる卒業論文への準備段階として行われるべきものだということである。目前の課題に取り組むことで論文を書き上げるための基礎力をつけながら、同時に自分なりの視点を養うことで自分なりに発見の感覚を持てるよう日々取り組んでいくことが望まれる。そのことが卒業論文執筆をより容易にもし、また実り多いものになると信じる。

国際文化コースの各分野においては専門的研究テーマを設定して、興味ある専門分野をより深く学ぶために多様な専門科目を用意し、学生が自ら主体的に課題に取り組めるように自由度の高い選択を可能にするカリキュラムを提供している。これらの多様な専門科目から分野ごとに定められた単位を取得することが卒業の要件になっている。できれば4年次に余裕を持って卒論に取り組めるように単位を取得することを推奨する。

4年次にはいよいよ実際に教員の指導のもとに卒業研究論文に取り組むことになる。教員1名に対して学生3名程度の少人数制で、一人ひとりの学生に対して非常に細やかな指導が行われる。評価法としては、期末試験だけでなく、講義の理解度を確認するために、小テストや中間試験を行うことがある。また、情報を収集・分析する能力や、自分の考えをまとめる能力を評価するためにレポート課題を課す、自分の考えを論理的に表現する能力を評価するために授業中にプレゼンテーションを行うなどして、総合的に評価を判断するのが一般的である。

#### ② 当該分野以外においても普遍的に有用性を持つ能力

国際文化コースの諸分野における学問においては、ひとつの正しい答えが存在するものではなく、むしろ自分で問題を見だし、それを立場の違う人たちに説得的に伝えていくことが求められる。専門教育を通して学ぶ深い精神の蓄積に触れることで、現実の自分とは時間と空間において隔てられているそれらの蓄積の中に、現在の自分自身の存在の根幹につながるような問題・課題を発見、設定し、それに取り組む能動的学習姿勢を身に付けるとともに、これらの問題・課題を研究する過程で論理的思考力を鍛え、情報集中能力を研ぎ澄ませて知識を取捨選択的に取り入れ、それらの知識を踏まえた上で問題解決を探る総合的問題思考力を育成すべきである。またそれぞれの学問分野における蓄積に対して取捨選択的に対峙していくことによって、過剰な情報にあふれた現代世界のあり方への対応の仕方が身に付くとともに、それぞれの分野で求められている研究を行うことによって、伝統的社会が

真理として持っていた意味の枠組みが失われてしまった近代社会において、自らがある程度主体的に再構築すべきものとしての倫理観、社会的責任を自覚することができるよう強く希望している。

基礎ゼミ、演習などの少人数教育では、特に他者との議論を通して自らの考えを伝え、他者と協調して作業を行うことができるコミュニケーション能力が身に付く。卒業研究では、これらの能力をすべて発揮して論文を作成する。これが学士課程教育の集大成になる。

## (2) 専門教育における学習成果と授業科目の対応表 (カリキュラム・マップ)

別表のカリキュラムマップを参照のこと。

## (3) 全学共通教育における学習成果の確保のための履修要件・履修指導等の基本的考え方

### ○基礎ゼミナール

課題発見から、調査、討論、プレゼンテーションまで、少人数制 (24名程度) のクラスに分かれて学問の技法を修得するため、1年次前期に必修としている。コミュニケーション能力、総合的問題思考力、能動的学習姿勢の修得ができる。

### ○言語科目

話す、聞く、読む、書く、という4つのスキルを、レベル別クラスで反復して学習することによって実践的な英語を修得するために、1年次前期から2年次後期までの実践英語8単位を必修としている。また、未修言語科目のドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語のいずれかを1年次あるいは2年次に必修として履修することを定めている。これらの科目によって言語の基礎的な知識を修得するだけでなく、異なる文化・社会を理解できる能力を身につけることが期待される。

### ○情報教育

パソコン活用能力だけでなく、情報収集、編集、表現、発信など、課題解決型の授業によるITスキルの実践的能力を身につけるため、1年次前期に「情報リテラシー実践I」を必修とし、情報活用能力や情報倫理に関する知識を修得する。

### ○教養科目群・基盤科目群

幅広い教養を身に付け、総合的な思考力や問題解決能力を育成するとともに、多角的な視野を持つことを目的として、合計14単位を取得することを卒業要件にしている。

## (4) 年次進行判定

2年次終了判定を以下の基準で行う。

次の①、②の要件を満たしていること。ただし、2年次を経ずに3年次に進級することはできない。

① 24ヶ月以上在学していること。

② 言語科目12単位を含む44単位以上を修得していること。